

安全・安心で快適に住み続けられる都市 「コンパクトシティ」に向けて

「コンパクトシティ」構想が出てきた背景

阪神・淡路大震災では、その教訓として、「市民生活」や「地域」などがいかに大事であるかが改めて認識されました。また、人と人とのぬくもりを大切にす
る「きずな」こそ、震災時の神戸の実践そのものでも
ありました。地域のまとまりや市民生活における日常
的な結びつきの重要性が改めて浮き彫りにされたとい
えます。

また、少子・超高齢化や、情報化、地球環境問題へ
の関心の高まりなどの「時代の潮流」に対応して、よ
り快適で充実した市民生活の実現を進めるために、地
域ごとの特色を生かして、市民・事業者と市の協働に
よる多様で個性的なまちづくりを進めていくことが求
められています。

このような「震災の教訓」や「時代の潮流」を踏ま
え、平成5年9月に策定した「新・神戸市基本構想」
で打ち出した、生活者重視や、地域を軸にしたまちづ
くりの推進、多核ネットワーク都市づくりなどの考え
方に基づいて、安全・安心で快適に住み続けられる都
市の姿である「コンパクトシティ」を提唱しています。

「コンパクトシティ」とは何か

神戸は、海・山・街・田園という多様な環境や、東
西に長い既成市街地と臨海部の埋め立て地・六甲山裏
側のニュータウン群とがネットワークされた都市構造
を持っています。このような神戸のまちの特徴や都市
構造を生かし、それぞれの地域に自律した生活圏(「コ
ンパクトタウン」)が形成され、それらが相互に連携
してつくられる都市を「コンパクトシティ」と呼んで
います。

「コンパクトシティ」を構成する「コンパクトタ
ウン」は、「わがまち意識のもてる地域のまとまり(い
わゆる歩ける範囲)の中で、日常生活の身近な用を足

すことができ、住民が、歴史・文化や自然などのまち
の個性を生かして、まちのあり方について考え、自ら
まちづくりを実践することによって、安全で安心して
快適に暮らせる生活圏を築く」ものです。

「コンパクトタウン」は次のような形成イメージを
持っています。①それぞれの地域の自然、歴史、文化、
景観などを大切にする、②環境と共生し、地域循環シ
ステムをつくる、③コミュニティを大切にする、④地
域に密着した経済を育てる。

「コンパクトシティ」づくりの取り組み

「コンパクトシティ」づくりにおいては、地域の人々
が、自分たちのまちに愛着を持って住み続け、そして、
安全・安心で快適なまちを次世代の人々に引き継いで
いくことを考えながら、まちづくりを進めていくこと
が重要な鍵になります。

神戸市においても、「区別計画」に基づいて各区で
の個性をのばすまちづくり事業を展開するとともに、
まちづくり協議会、里づくり協議会、ふれあいのまち
づくり協議会、防災福祉コミュニティなどの協働のま
ちづくりを進めています。また、多核ネットワーク型
都市構造を維持していくため、都市計画法による市街
化区域と市街化調整区域の区分(線引き)、「緑地保全、
育成及び市民利用に関する条例」、「神戸市民の環境を
まもる条例」、「人と自然との共生ゾーンの指定に関す
る条例」、交通・情報ネットワークの整備などによっ
て、都市の成長管理を行っています。さらに、平成11
年8月に策定した「新たな行財政改善の取り組み」に
おいて「コンパクトシティ構想の推進」を位置づけ、
その推進施策の充実を図っていくこととしています。

このように、市民・事業者と市との協働の精神に基
づいて、「コンパクトシティ」づくりを推進し、持続
可能な都市の実現をめざしていきます。

『第3期 こうべ市民安全まちづくり大学』 修了式・修了記念講演

9月に開講した第3期こうべ市民安全まちづくり大学も、いよいよ修了式を迎えました。式には、本大学の学長である北村新三 神戸大学都市安全研究センター長を迎え、修了証書の授与を行い、笹山神戸市長の代理で梶本 日出夫 市民局長から市民安全推進員の委嘱を行いました。



本日多くの方が本大学を修了されたことをお祝い申し上げます。半年間の講座のなかで、私たち神戸大学都市安全研究センターなどから第一線の研究者が講演してきましたが、このような場でお話することで研究者も皆様のご意見を聞かせていただき、新たな研究課題を得たことと思います。安全なまちづくりは地道な積み重ねが大切です。この大学は来年度以降も開講されますので、ぜひ皆さんも、身の回りの方に声をかけてください。



この半年間熱心に勉強され、修了された皆様に心からお喜び申し上げます。これからの安全で安心なまちづくりには、市民・事業者と行政が力を合わせて誰もが安心して暮らせる安全なまちを築くこと、特に、市民一人ひとりにとって身近な近隣において安全で安心なコミュニティをつくっていくことが大切です。市民安全推進員に登録された方は昨年度登録された皆さんと同様に、地域でリーダーとして活躍されることを期待しています。

今年度は、入門講座を 136 名が、まちづくり講座を 54 名が修了し、54 名の市民安全推進員が新たに誕生しました。これで、昨年度までの推進員と合わせて、162 名の市民安全推進員が登録されたこととなります。これら推進員の皆さんの地域での活躍を支えるために、また来年度以降も多くの推進員が後に続くように、事務局としても今後いっそう努力してまいります。

修了式に続いて、神戸大学都市安全研究センターの室崎益輝教授から、「安全で安心なまちづくり」と題して、修了記念講演をいただきました。

阪神・淡路大震災で得た教訓は、①ソフトよりハード、②堅い防災よりも柔らかい安心、③使いすてよりも使いこなし、④事後対応よりも事前防備、⑤行政主導よりも市民主体、です。

安全で安心なまちづくりでは、安心なコミュニティすなわち地域社会を守ることが重要であり、これが自分自身の安全につながるのです。また、日頃からコミュニティは自律して地域の監視をし、危険な環境を排除すること、そしていざ災害が発生したら力を合わせて対応すること、が大切です。

これからの安全で安心なまちづくりは、地域社会がいわば運命共同体として、コミュニティ、ボランティア、事業所などさまざまな人たちが支えあうことができれば、誰にでもやさしいまち、災害にも犯罪にも強いまちになるでしょう。



中央区におけるまちづくりの事例を紹介しているうちに10回目を迎えることになったが、今回は、持続可能なまちづくりの推進のために、住民・行政にとってどのような役割がもとめられるのかについて考察し、最終回としたい。

先進的なまちづくりの事例が紹介される時、その劇的な筋書きにワクワクするものだが、何故うまくいったかという問いに「カリスマ的な住民リーダーの方が居たから」という答えが返ってくると「やっぱり」という気持ちにさせられる。カリスマ的な住民リーダーがそとどこにでも居るわけではなく、その出現を待っていれば一向にまちづくりが進まないことになってしまう。また、カリスマ的とは言えないまでも、地域活動に専心されるリーダーの方の動機づけとして、かつての「修身」教育に根ざした自己犠牲心や公德心をあげる方が少なくない。今後のまちづくりや地域活動の将来を考えた場合、特定の住民リーダーの資質に依存し続けることには限界があり、幅広く住民が参画できるしくみづくりが必要である。

一方では、震災を契機として、多くのボランティアやNPOが勃興してきたが、これらは地域の住民活動とは組織の性格や動機づけが異なるため、有機的に結びついていくことが今後の課題である。ボランティアは特定目的の実現のために「この指とまれ」的に自主的に集まったネットワーク型グループといえるのに対し、地域住民活動は、地域の課題解決のために地縁的に結びついたピラミット型グループである。そのためボランティアグループは、より高次の目的実現に特化していくことも少なくないが、地域住民活動は、例えば、公害反対など一つの目的のために立ち上がったとしても、地域に存在する多分野の課題解決のためまんべんなく活動を広げていく傾向にある。また、地域活動では、誰から声をかけていくかなどの意思決定の手順を大切にし、特定の人が目立つことを避けるのに対し、ボランティアでは、手順より速効的な結果やパフォーマンスを重視しがちであり、地域とのトラブルの原因となることもある。

一方、地域住民活動もピラミット型グループであるが故に、いわゆるボス化を招いたり、窮屈さになじまない若手に敬遠されることもある。

このように両者に特質がある中で、それぞれの良さを生かしたまちづくりのしくみについて、事例も交えて考察したいが、紙面の関係上ここではいくつかのポイントだけを述べたい。まず、第一点目として、専門的な知識を有したNPO等のノウハウを地域活動に生

かす一方、NPO等が地域で自己実現できるようなまちづくりを目指すことである。言い換えれば、地域コミュニティとテーマコミュニティが融合できるステージづくりとそれによって地域に根ざしたNPOの育成を図るということである。第二点目は、長老グループと若手グループのトロイカ体制によるまちづくりである。例えば、南京町では若手グループが中心となってイベント運営が活発に行われ、活力ある組織の好例となっている。これはかつて、日本の村の自治組織の中で「若者組」や「若衆」が専ら村祭りなどの遊びの活動の中心となっていたことに似ている。第三点目は、活動の動機づけとして自己犠牲心だけでなく楽しむ心や遊び心を大切にすることである。長年リーダーを努めていた方に共通するボランティア観として、ボランティアとは自分が良い事を行っているからと言って他人にも同様の貢献を求めるのではなく、自分の持っている時間、労働、財などを身の丈に応じて供出するものであるという話をよく聞いた。これは、日本古来の自分にとって貴重な米、金銭を他人に分け与えることによって功德を積むという「布施」の概念やサービスのように対価（チャージ）を求めない「ホスピタリティ」の概念に共通している。直接相手に対価を求めるのではなく、良いことをすればいつかは自分に返ってくるという「お互いさま」「互惠」の精神に基づく主体性がまちづくりを無理なく楽しめる原動力になると思われる。これもあるまちづくりリーダーの言葉だが「地域が活性化するという事は、そこに住み働く人が生き生きとしていることである。」というように、個人の主体的な姿勢が地域の活力を生み出すと考えられる。

そのような主体的な住民とパートナーシップを築いていくためには、行政も主体的でなければならない。住民に一定の行政サービスを提供するという姿勢だけでなく、コミュニケーションの中から共感しうる価値観を見出し、その実現のために地域資源をどのように組み合わせ、活用していくかというコーディネーターの役割が今日求められているのである。

5回程度と思っていたのに、まんべんなく地域の事例紹介をしようと考えているうちに10回を数えてしまった。それでも全て紹介できなかったことをお許し願いたい。機会があれば加筆してまとめてみたい。途中「課長楽しみに読んでいるよ。」と住民の方から声をかけて頂いたことが最も励みになったことは言うまでもない。本当にありがとうございました。

(前中央区まちづくり推進課長・現教育委員会社会教育部体育保健課長 見通孝)

まちなみライブラリーニュース

こうべまちづくりセンター図書室
 まちづくり会館 4階・TEL 361-4523
 開館時間 午前10時～午後6時
 休館日 水曜日・年末年始

新着図書のご紹介

	図 書 名	著 者・編 者	発 行 元	発行年月
1	垂水百年のあゆみ・続編	垂水郷土史研究会	垂水郷土史研究会	1999年8月
2	伝えたいふるさとの景観	兵庫県都市整備協会	兵庫県都市住宅部	1999年3月
3	タウンモビリティと賑わいまちづくり		学芸出版社	1999年2月
4	分権社会と都市計画	小林 重敬	ぎょうせい	1999年8月
5	既成市街地の再構成と都市計画	小林 重敬 他	ぎょうせい	1999年8月
6	高度情報化と都市・地域づくり	平本 一雄	ぎょうせい	1999年9月
7	スコットランド首都圏形成史	小林 照夫	西山堂書店	1999年4月
8	都市計画法令要覧(平成11年度版)	都市計画法制研究会	ぎょうせい	1999年9月
9	夢を形にするちから(まちづくりハンドブック2)	プロボス	豊中市政策推進部	1999年3月
10	わが町発見!(絵地図づくりからまちづくりへ)	世田谷まちづくりセンター	晶文社	1995年5月

当センターにふさわしい図書・資料をご紹介ください。担当：橋本まで

まちづくり会館からのお知らせ

こうべまちづくり会館 地階ギャラリーの予定

期 間	内 容	主 催
3月30日(木)～4月4日(火)	第14回 火彩会作品展(水彩)	火彩会
4月6日(木)～11日(火)	真率会展(日本画)	西田 真人
4月13日(木)～18日(火)	いくた15人展(油彩)	いくた15人 大森 美紀子
4月20日(木)～25日(火)	'99 仁影会展(写真)	仁影会
4月27日(木)～5月2日(火)	第1回新樹会展(水彩)	森 文男

こうべまちづくり会館 1階オープンギャラリーの展示

4月1日(土)～30日(日)	景観形成重要建築物写真展	都市計画局アーバンデザイン室
5月5日(金)午後2時・3時	パチュニアサロンコンサート	元町4丁目商店街・アスク音楽院 こうべまちづくりセンター

すまい・まちづくりのご相談は

- すまい・まちづくり人材センター
 (こうべまちづくり会館 3F)
 電話 078-361-4377 FAX 078-361-4584
 受付は、月・火・木・金曜の午前10時～午後5時
- 土・日・祝日は
 まちづくり相談コーナー で受け付けます
 (こうべまちづくり会館 4F)
 時間は、午前10時～午後5時

自治会活動などのご相談は

- コミュニティ相談センター(まちづくり会館4F)
 会報等の印刷サービスや学習会へのインストラクター派遣など
 受付:午前10時～午後6時(水曜・年末年始は休館)
 電話 078-361-4565



〒650-0022

神戸市中央区元町通4丁目2-14

電話 078-361-4523

FAX 078-361-4546



この印刷物は、古紙含有率70%の再生紙を使用しています。